佐原の町並みかわら版

第５５号
平成２７年２月

発行　NPO法人小野川と佐原の町並みを考える会
佐原町並み保存会

お問い合わせ
佐原町並み交流館
電話　0478(52)1000

～佐原を懐かしさで演出して八年～
ボンネット・バス乗車人数が五千人突破

平成二十年一月十四日（月）から八年間にわたり走り続けたボンネット・バスの乗客数が、平成二十七年一月四日（日）の第二回目の最後の乗客で五千人目となりました。

バス運行の始まり

「小野川と佐原の町並みを考える会」会員の香取孝さんから「同じクラッシック車愛好者の石岡市在住の小嶋幸夫さんが佐原へ来るから一度会ってみてくれないか」と佐原町並み交流館館長小林和男さんに紹介があり、ボンネット・バスを見た瞬間、「佐原にぴったりだ」と小林さんは直感。「ぜひ佐原に走らせてくれないか」と、話がとんとん拍子に進んだのが平成十九年の秋のことでした。

佐原は楽しい町だ

日本有数のクラシック車コレクターとして知られる小嶋さんは、「熱い夏は走りませんが、佐原に来るのは年に二十回ほど。一時間とちょっとで来られますから。土、日曜の運行で、きついと思われるかもしれませんが、良いことや楽しいことが沢山ありました。

佐原の皆さんは前向きで意欲がありますよ。佐原の大祭は年に二回もありますからね」と話しています。

左から、小嶋さん、ガイドの渡辺さんと清水さん。乗客数千人突破の記念に。

佐原の町並みに溶け込む

小林和男館長は、ボンネット・バスの運行について次の様に語ります。

「バスの運行は佐原の懐かしい風情を一段と際立たせてくれます。

小嶋さんは「考える会」の会員にもなってくれて、ボランティアでここまで頑張ってくれていることに本当に感謝しています。一日三回走りますが、満員でも二十人位ですから、乗車数が五千人を突破したというのは驚異ですね。

町並みをバスの窓越しに見るのも楽しいが、歩く観見客の目も楽しませてくれます。広島や九州から写真撮影に来る人がいますよ。

ボンネット・バスは、マスコミにも取り上げられて、佐原にはなくてはならない風景の一つになりました」

牛久シャトー・カミヤで
煉瓦造り修復を見学

今年度の会員研修は、二月四日（水）に牛久市のシャトーカミヤ煉瓦造りを見学しました。

修復作業を監督する文化財建造物保存技術協会の高橋好夫さんの講義の後、明治中期に建造された本格的煉瓦造りのワイナリーの発酵室と地下と事務所棟を案内されて震度5弱の被害状況を知りました。

煉瓦間に入れる壁面補強材アラミド繊維、引っ張り材を入れた穴に注入するセメント系のグラウト材、発酵室の外壁に取り付けた補強鉄骨材のバットレスという支柱等、文化財的価値に配慮している苦労話や貯蔵庫地下は発酵菌が定着しているので手はつけない等の話も聞けました。

亀裂が生じたという煉瓦積みの妻壁を見上げる会員たち。

内部の補強鉄骨材を保持する外側に取り付けられた支柱。

「交流館」入館者百万人超

平成十七年四月に開館した「佐原町並み交流館」の入場者数が平成二十七年一月末に百万人を突破。

骨董市開催・百回記念

平成二十六年十一月三日（月・祝）に骨董市開催百回目の祝賀イベントが八坂神社境内で行なわれた。既に九月で百回に達していたが、天候の都合で延期されていたもの。

まちづくり提案委員会

平成二十六年末より、重伝建及び景観地区内の「電線地中化」「バリアフリー」「自転車周遊」「多言語化」「アーバンデザイン」の五つの課題で意見をまとめ、三月末に千葉国道事務所に提案書を提出する。

伊能忠敬を歩測体験で学ぶ

来る五月二十九、三十、三一日、近隣の市町村と共に伊能忠敬の歩測体験を二班に分かれて実施する。九十九里浜で歩測体験後、片貝から佐原まで歩く。（成田空港の支援事業）

喜多方市へ友好・研修の旅

昨年十一月二、三日に、喜多方市に「考える会」から九名、香取市役所から四名が赴いた。第一日目は意見交流会、二日目は市内を案内していただき、「甲斐本家蔵座敷」や大和川酒造の「北方風土館」、市外の「三津谷の登り窯」を見学した。

☆第三七回全国町並みゼミ鹿島・嬉野大会☆

『つなごう歴史遺産・みがこう町並み文化』がテーマ

～有明海で栄えた塩田津と肥前浜宿の町並みを会場に～

二〇一四年一一月七日から九日の三日間、鹿島市浜中町八本木宿、浜庄津町と嬉野市塩田津の三ケ所の重伝建地区を会場にして七分科会に分かれて討論が行なわれました。当「考える会」からは、全国町並み保存連盟の事務局長でもある高橋賢一理事長と三名の会員が参加しました。

今年が連盟四〇周年を迎えたことから、最終日の嬉野市社会文化会館での記念行事として高橋理事長が「町並みのこれまでとこれから」と題する講演を行ないました。

三名の参加者から感慨を込めたレポートを寄せていただきました。

「郷育」をテーマにして

伊藤　待子

第四分科会は「歴史遺産を次世代へ繋ぐ、全国の仲間と共に」をテーマに鹿島市浜宿の「呉竹酒造の東蔵」ホールで行なわれました。

パネリストの事例報告では、大人が感じている町の誇りや素晴らしさ、大切さを次代を担う子供達にしっかり伝えていきたいという使命感を持ち熱い思いで活動している様子が強く伝わってきました。

また「鹿島市立浜小学校」と「嬉野市立塩田小学校」の六年一組の児童発表では、ふるさと学習の資料や町並みの絵画展示、映像、寸劇、音楽等で自分の町と人の「よかとこ」と「これからの町へのアイデア」が紹介され、会場から大きな拍手がありました。

佐原でも大人の思いを子ども達に伝える継続的なプログラム作りが必要だと強く思いました。

開会式場となった呉竹酒造の東蔵の舞台正面。第４分科会もここで行なわれた。お宝満載の重伝建のまち。

何軒も醤油蔵、酒蔵が残る浜中町八本木宿の通り。年間を通して多彩なイベントで集客に努力する。

空家をなくし若者を呼び込む

新井　勝治

第五分科会は「空き家の活用・再生を考える」をテーマに、塩田町の「本應寺」の格式ある寺内を案内された後、石油ストーブで暖められた本堂で行なわれました。

福岡県福津市の津屋崎での「古民家を再生してプチ起業を育成し子育て世代を呼び込む」取り組み、新潟市での町遺産の会の「会津八一記念館」の保存や町屋ギャラリーの開設等の取り組み、また福岡県八女市での地域資源を掘り起こして公的資金に頼らない民間の活力によって商いをしている取り組み、塩田町の「空家の活用」の報告等がありました。

佐原でも、他地区の実績を参考にしながら、積極的な情報開示と修復・保存運動を通して、若者を取り込んだ商いを推し進めていく必要があると思いました。

地域遺産をどう活用するか

玉造　功

第七分科会は「暮らしと文化に根差したまちづくり」がテーマで、会場は志田焼の里博物館の中にある四十名を越す参加者を収容できる巨大な志田焼の窯の中で行われました。

「志田焼の里振興会」の事例報告によると、昭和五十九年に廃業した陶磁器工場をそのまま保存して市営の博物館とし、地元の自治会が振興会を結成して指定管理者となって、児童生徒の体験学習や祭りの場として利用しているとのことです。まさに、地域遺産を地域の人々が守り活用している好事例だと思いました。

第７分科会場の大窯の内部。大正３年～昭和５９年まで操業した工場を道具、磁器の破片まで引き継いだのが利点。

佐賀県唐津市の港町呼子町の「鯨屋敷」と港の風情を残す取り組みや茨城県桜川市真壁の「歴史的町並み保存」の活動発表がありました。

火の気のない底冷えのする窯の中で、地元民の伝統を大切にしようとする熱い思いを実感しました。

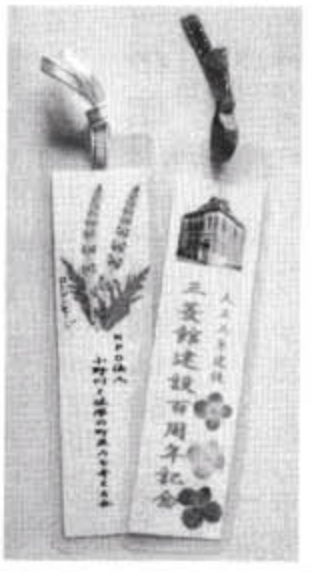
☆佐原町並み交流館行事☆

○第一日曜日は骨董市

○平成二六年九月七日（日）
香取市さわら軒先コンサート
「ソプラノ歌手とピアノ三重奏による晩夏に響くなつかしい歌」

○九月十日（水）～十月十五日（水）
佐原三菱館建設百周年記念展

○三菱館建設百周年記念展、今年度末まで（大金庫内・アンケートに答えた方に左のシオリを差し上げます）



○十月四日（土）、二六日（日）
佐原町並み号ボンネットバス運行

○十月十八日（土）～十一月三日（月）
色鉛筆で描く佐原の町並み・第四回古河博幸作品展

○十一月四日（火）～二十日（木）
ミニチュア・フード・ドールハウス展
ミニチュア研究会代表・橋本京子

○十一月二十二日（土）
第二回佐原茶会・佐原商店会連合会

○十一月二三日（日）～十二月六日（土）
時の流れに感謝して佐原との出逢い
魚谷幸子水彩画展

○十一月二九日（土）三十日（日）
佐原町並み号ボンネットバス運行

○十二月七日（日）さわら軒先コンサート・弦楽四重奏によるクリスマス・コンサート

佐賀県の鹿島と佐原

玉造　功

九州へ旅立つに先立ち、私達は市内上小川にある円通寺の肥前鹿島藩鍋島氏四代が眠る墓所にお参りをした。

ここに鍋島氏の墓所があるのは、１６００年の関ケ原の戦いに端を発する。佐賀鍋島藩祖・鍋島直茂は中立を保とうとしたが、長男勝茂が西軍に付いて参戦したため、その後、鍋島家は存亡の危機に直面したのである。藩祖直茂は、次男忠茂を徳川家康への人質として差し出して難を逃れた。忠茂は徳川秀忠に近侍して気に入られ、１６０２年に下総の矢作領五千石を領地として賜わることとなった。父直茂も忠茂の功に報いるべく鹿島二万石を与え、これを支藩とした。

忠茂は、矢作領で歿し、嫡子正茂が鹿島領と矢作領を合わせて二万五千石を継いだが、本藩を継いでいた伯父の勝茂との対立が起ったので、結局は、鹿島藩を返上して徳川家の旗本となった。

１６９８年、第五代長行のとき三河国に移封された。これが鍋島氏四代の墓所が上小川にある所以である。なお、神崎町四季の丘近くに鍋島家の「郡（こおり）陣屋」が置かれていたという。

鹿島市では平成２４年に、伊能忠敬来鹿二百年記念祭が行なわれ、小学生の発表会、歩測体験、測量隊を偲ぶウォーキング、「伊能御膳」の再現等があった。香取市と鹿島市との間では「連携協定」が結ばれていて、子供を含めた相互の訪問を重ねている。

両市は、重伝建地区や酒造業が盛んである等の共通点が多い。

忠敬一行が宿泊した嬉野

伊藤　待子

ゼミ初日の懇親会と夜ねべ談義は嬉野市の格式あるホテル「大正屋」が会場で、ホール一杯に轟く不知火太鼓の演舞に迎えられて歓迎懇親会が始まりました。

嬉野は日本三大美肌の湯といわれる温泉やお茶処として有名な町で、市街地を長崎街道が貫ぬき、宿場町らしさが今も残っています。

また嬉野は一八一三年秋、第八次の伊能測量隊が宿泊した町で、測量日記には「温泉あり。止宿小筒屋、大村屋」と記されています。明治に入ってからは旅館となりました。

嬉野川に面した木造三階建ての大きな建物の裏側には立派な説明板が設置されていて、伊能忠敬の足跡が詳しく書かれています。（写真）

説明板のすぐ前には、江戸へ上る途中にシーボルトも入浴したという温泉（藩営浴場）があります。きっと忠敬一行もここで測量の疲れを癒したかもしれません。現在は「シーボルトの湯」という公衆浴場になっています。

平戸市松浦資料博物館の伊能図

玉造　功

全国町並みゼミ鹿島・嬉野大会の現地見学では、新井、伊藤、玉造の三名が離島の重伝建地区の「神浦」と平戸市を巡るコースを選びました。

目的は、平戸市の松浦資料博物館が所蔵する九点の由緒正しい「伊能図」を拝見することがその主眼だったからです。

「由緒正しい」というのは、この地図が写本ではなく、伊能測量隊の作成によるものであること、平戸藩九代藩主・松浦静山が地図作成を依頼した経緯について、自著「甲子夜話」の中で『伊能を招いて接待し・・・・領内測量の地図を予に贈るべしと約して、伊能も諾したり』と記録していること、忠敬先生の日記の中でも松浦静山との交流が記録されていること、そして忠敬先生の歿後、地図を受領した平戸藩が「御絵図副書」にその経緯を詳細に記録していることに拠るからです。

「御絵図副書」によると、忠敬先生との約束により天文方の高橋景保から入手した地図に対する経費として金六両三歩と銀二匁を支払い、景保本人には「茶宇御袴地一反」と「ていら三斤」を、さらに地図作成にあたった下役八名に対しては金五百疋などを贈ったと記録されている。

博物館内をうろうろしながら漸く念願の「伊能図」に対面することが出来ました。展示してあったのは「平戸藩領図」の平戸島の部分と「九州一円之図」で、丁寧な仕上げの美麗極まりないものでした。

とにかく、「六両余」という金額が高いのか安いのか？「ていら」とはカステラのことであろうか？こんな雑念が私の頭の中で今でも堂々巡りをしている。

松浦資料博物館は、明治２６年に建てられた旧平戸藩主の私邸。重厚な板張りの廊下を通って館内を巡る。

○十二月九日（火）～十四日（日）
日本盆栽協会水郷佐原支部冬季盆栽展

○十二月十六日（火）～二五日（木）
佐原の観光と祭り写真コンクール
二六年入賞作品展

○十二月二十日（土）二十一日（日）
佐原町並み号ボンネットバス運行

○十二月二六日（金）書星会師範・日本書道学士院総務師範本宮華水席上揮毫

○十二月二八日（日）～平成二七年一月十二日（月）
さわら・町並み・お正月　お正月飾り

○一月四日（日）神田囃子水鼓の会・壽獅子舞、惠壽美会・佐原囃子

○一月四日（日）佐原町並み号ボンネットバス運行

○一月六日（火）～二月二日（月）
山の自然を編んで～平成二六年国立新美術館「現展」奨励賞作家・藤崎たつ子・つる工芸作品展

○一月二五日（日）、二月一日（日）
佐原町並み号ボンネットバス運行

○二月二日（月）～八日（日）
未来に伝える里神楽の舞・企画展

主催・香取市伝承芸能保存連絡協議会。二月八日に演舞会開催・牧野大神楽、下小野の神楽（写真）

○二月九日（月）～三月二九日（日）
さわら雛めぐり～お雛さまの舟遊び～

○二月二一日（土）
佐原町並み号ボンネットバス運行

町並みを歩いて（その十）

重伝建地区の隠れた魅力を発掘

小野川沿いの街路樹と柵

（上）の写真は、昭和初期から戦前のものです。木造の山野病院前にはプラタナスがまばらに植えられています。

（中）の写真は、昭和四十年中頃。ポプラの根が護岸を壊すというのですっかり伐り倒されました。

（下）の写真は、昭和四九年頃の本川岸で、両岸には柳が見えます。かつて小野川には百五十近くも「だし」と呼ばれる舟着き場があり、街路樹は邪魔な存在でした。

ＪＲ成田線の鉄橋より下流は、かつて舟だまりの場所であったので、現在でも、桜、柳、果樹等が散在しています。

昭和三十年代まで、川の両岸には柵はありませんでした。豪雨のたびに小野川は満水となり、とても危険でした。大事故があって以来、白い鉄パイプ柵が設置されました。昭和五九年（一九八四）佐原市観光振興基本計画に基づき景観に配慮したコンクリート製の擬木柵が設置され、事故防止に役立っています。

忠敬の家訓に感動した

校外学習のときは、佐原の町並み、伊能忠敬さんのこと、山車会館など佐原でしか見られないものを見せていただきありがとうございました。伊能忠敬さんは地図をつくった人というのは知ってはいましたが、学校でならったこと以外のこともたくさん聞けました。

ジャージャー橋をよいタイミングで見せていただきました。山車会館では、人形がとても高さも大きく、本物の人かと思うくらいすごかったです。

わたしの心のなかにしっかりはいった言葉が伊能忠敬さんの一、うそをつかない、二、よい意見はとりいれる、三、けんかをしないの三つの言葉です。よいお話をありがとうございました。

（千葉市高洲第三小四年・女子）

観光案内に感謝の礼状（その13）

短歌を一首紹介

忠敬は歩きで一人地図作りとてもすごいな地球

一しゅう　渥美勇人（ゆうり）（千葉市花園小・四年）

※去る十一月三十日（日）の建物公開時、忠敬旧宅におばあ様がお友達と来られ、案内ボランティアにこの歌を見せてくれました。おばあ様は、お孫さんが校外学習で佐原に来た時の感想に感動し、ぜひ案内ボランティアに紹介したかったと言いますので、おばあ様の承諾を得て紹介します。忠敬の偉業は一人忠敬だけでなしえたものではありませんが、このような広がりは嬉しいことです。

伊能忠敬の全国測量（第二次測量）

伊豆半島、房総半島一周、太平洋岸を北上す

寛政十三年正月、忠敬としては、安房、上総、下総、奥州海辺からクナシリ、エトロフ、ウルップへ行こうと思っていたが、結局は多難な蝦夷地行きを諦め、本州東沿岸の測量をすることとなった。

測量隊は忠敬と平山郡蔵と宗平、尾形慶助、伊能秀蔵、下僕嘉助の青年五人。郡蔵は宗平の二歳上の兄。忠敬が佐原に入婿する際の仮親季忠の孫。尾形慶助は香取神宮神官尾形平馬の養子で十五歳。郡蔵と同じ津宮の久保木清淵の門人で、以後殆どの測量に参加し忠敬学統唯一の継承者となった。

二度目の箱訴で苗字・帯刀を

忠敬の蝦夷行きは元百姓・浪人の身分では本人も周囲も通行手形に問題ありとして、佐原村に幕府直々に苗字・帯刀の許しを働きかける（箱訴）ようにと依頼した。出発直前の寛政十三年一月、二度目の箱訴が受け入れられた。

郡蔵、宗平、秀蔵ら道に迷う

享和元年四月二日（陽暦五月十四日）朝八時頃、忠敬は慶助と共に川崎、保土ヶ谷辺を測り宿へ帰着したが、大師河原方面へ向った郡蔵、宗平、秀蔵の帰りが余りに遅い。慶助、嘉助、宿の者や役人も探しに出た。夜十時頃に帰着はしたが「雨天闇夜に難儀させしは、後々までも遺恨なりし」と忠敬は大いに反省した。

三浦、伊豆半島を測り房総半島へ。七月十五日（陽暦八月二三日）故郷の片貝、小関村を測量したが特別な記述はない。銚子飯沼村に止宿した夜、佐原から三郎右衛門家やら数人が見舞いに来た。銚子に九日間留まり晴天を待った。

富士山と筑波山を観測す

七月二十六日（陽暦九月三日）銚子は晴天。「この朝、富士山を測量できた。その悦知るべし。予、病気も最早全快に及べり」と感激した。

松島への途上、旧友に再会

妻達（みち）と松島行の折、鉾田辺より同道した仙台先の分ケ浜の商人秋山惣兵衛と知り合った。仙台で歓待を受け、再度この辺に来たら訪ねてくれと言われた二四年前を思い出して再会を果たした。又、交易で伊能家に立ち寄ったという気仙沼の日除儀右衛門の家に偶然止宿した。

十月十三日（陽暦十一月十八日）下北半島は雪と強風で、砂浜では駕籠の屋根も海へと吹き飛ばされた。

大畑村で前年蝦夷で出会った忠助と清蔵に再会。十一月三日（陽暦十二月八日）三厩着。平館村で宗平が病気。野辺地は大吹雪。盛岡では夜小雪の中でも測量した。

ようやく十二月七日（陽暦一月十日）江戸へ到着した。